

## 1. 友だちづくりのきつかけをつかむには② どんな子と仲よくなればいいのか

人間は、自分にとって大切なものを大切にします。人間関係も同じで、「この子、好きだなあ」「一緒にいたいなあ」と思える子はいじめたりしません。逆に「この子はイヤだ」という子が近づいてきたら、「あっちへ行つて」と遠ざけたくなるでしょう。なぜ「イヤだ」と思うのか。たとえば余計なことはかり言ったり、真剣に何かをしている時にちよっかいをしかけたりして邪魔をする。何かと失敗して迷惑をかけるのに、助けても「ありがとう」「ごめんね」のひと言もない。そういうことが続くと、「あの子はちよつと苦手だな」と思うでしょう。

自分を大事にしてくれる子と、迷惑ばかりかけるのに知らん顔する子。仲よくなりたいたいのとはちらかははっきりしていません。

ただ、それは相手も同じです。自分を大事にしてほしいなら、まず相手を大事

にすること。「この子と仲よくなりたいたい」と思ってもらえる子になる必要があります。たとえば自分が困っている時、「困ったな、困ったな」と言っているのに、友だちがそばでポーツと立っているだけだったらどんな気持ちになるでしょうか。あるいは「俺は大丈夫だよ」と他人事だったらどうでしょうか。ましてや「わーい、面白い」とはやし立てたりしたら、「コイツとはもう遊びたくない!」と思うでしょう。逆に「先生を呼んでくるね」などと言ってサッと動いてくれたら、「頼りになるなあ。うれしいなあ」と思うはずですよ。

こうした積み重ねのなかで、「友だち」と「そうでない子」に分かれていきません。低学年のうちは友だち関係も流動的ですが、学年が上がるにつれてはつきりとグループに分かれ、発言力の強い子とそうでない子との間に階層のようなものもできてきます。良し悪しではなく、どうしてもそうなってしまうわけです。その時、数は少なくとも助け合える友だちはいたほうがいいでしょう。そのために低学年のうちに下地をつくっておきましょうということですよ。

友だち関係が流動的なぶん、その場その場で体や声の大きな子が周りの子どもを巻き込むという形になります。楽しく遊べるなら問題ありません。しかし